

朔太郎の東西詩観

前 川 知 賢

1

朔太郎が文学作品を書きはじめたのは大正の初頭、およそ27歳の頃からで、はじめ短歌と詩とを書き、程なく詩に専念するに至ったものだが、大正3年の筆になり、後渋谷国忠によってまとめられて、去る昭和45年2月「ユリーカ」に一部が掲載された、長篇の随筆ノート「浄罪詩篇」の中に「西洋の詩と日本の詩」(Aの8)、「詩と和歌」(Bの14)と題する二節があり、その中で短歌、俳句など日本的ジャンルの文芸と詩との対比を行っている。即ち前者では、

好んで西洋の詩の短所を模倣して得意な詩人がある。

更に滑稽なるは西洋の詩の邦訳せる場合に止むをえずして慣用する一種の概念叙述眼を巧みに習得して詩作する人がある。

先づ汝自ら光榮ある日本の詩人なることを知れ。

彼等が歌麿や国貞から学びえた「一の真理」がなんであるかを考へるものは当然彼等の前にゴーマン不遜であれ。日本の詩人として、先覚者として、最初に詩人として我々は世界無比の先覚者の地位にあることを自覚せよ。

とも、

芭蕉、人麿及び我々の詩はすべて完全なる立体である。之に反し西洋人の詩は半立体である。西洋人の詩が未完品たる所以はここある。彼等の弱点がここにある。

ともいい、文字どおり日本的ジャンルの優越性を表明している。一方後者では、

日本語の韻文で最も技巧の洗練されて居るものは短歌である。この点では詩は歌の足下にも及ばぬ。（謙遜していへば我々は完全なる日本語の使用法さへも知らないのだ。）

詩が歌より進歩して居るといはれるのはその内容についてではある。この点からみれば歌は詩よりも十年遅れて居る。

歌には未来がない、詩には空バクたる未来がある。

と、ここでは両者を比較、その優劣を論じ、歌は技巧的には詩よりすぐれているが内容に於て劣り、一方詩の内容といえども空バクたるものだという。

こういった対比は朔太郎にとって極めて重要な意義を有するものではあるまいか。なぜなら、彼は爾後全生涯にわたってその取捨選択乃至融合和解について悩まされ、これを大にしては、「島国日本か世界日本か」という後年彼をおそった高名な二律背反も言葉を換えれば即ちそこにあったからである。周知のとおり、彼はその後『月に吠える』『青猫』などの輝やかな詩業によって地位を確立したが、昭和3年刊行の詩論書『詩の原理』で、日本的ジャンルを一擲、西欧の詩精神に赴くべきゆえんを宣言した。これは当時の詩壇にとっては勿論本邦文芸史上まさに画期的なことだったが、更にそれより10余年後の論集『日本への回帰』及び『帰郷者』などでは再転、文字どおり西欧からの180度的回帰を表明したのである。このジグザック振りはあまりにも周知のことだが、これとりもなおさず日本的なものをとるか、西欧に就くかの昏迷より生じたもので、初期にみられた上記のごとき対立はそのまま持ち越されて全生涯を支配しており、いわゆる詩における東西の確執とその融合は彼にとってまさに宿命的課題だったのである。

現代は情報化がその極に達し、たとえば企業の情報処理もアメリカ在のコンピューターによって行われる迄になった時代である。文芸の世界でも東西の融合がその日程にのぼるだろう日も近く、現に詩人大岡信によって俳句や短歌と現代詩との総合融和の試みが行われていることは、筆者が前回所報のとおりである。否、さような試みはすでに立原道造や西脇順三郎

らによっても行われたところで、朔太郎がその間の去就に迷ったということも、おかしいことではない。以下その詩集やエッセー（その大半は周知のとおりアフォリズムの形式をとっている）によってその間の動向を辿り、これに若干の私見を付加せんとするゆえんである。

予め私見の一端をいえば、筆者は昭和3年彼42歳の時刊行された『詩の原理』一卷で高唱されている西欧精神への傾倒をもっとも評価し、それから更に12年後の『日本への回帰』をもって期待を裏切る後退だったとするものであり、更に前記の東西対比の論をも含めて、彼が抱いていた東西文明の特質観及び彼が試みたと思われる東西作品の融合の企てについても全面的に左袒いたしかねるのである。しかしこれが大体の通説だとしても、そこに異論のありうることは当然だし、且私の論述の細部についても意外の過誤なきやも保しがたく、切に好学の士の御叱正を待つものである。

2

さて、まず根っからの国粹論者だった朔太郎が一転熱烈な西欧詩論者となった辺りからはじめると、西欧へのその傾倒がいかに熾烈なものだったかは、『詩の原理』の中の次の一節によって窺知されうるだろう。曰く、

あらゆる決定的の手段は一つしかない。文明の軌道を換へることだ。吾人の車を、吾人自身の線から外づして、先方の軌道の上に持って行くのだ。換言すれば、吾人のあまりに日本的なレアリズムやデモクラシーやを、断然として廃棄してしまうのだ。そして同じレアリズムやデモクラシーやを、西欧文明の軌道に於ける、相對上の觀念に移して行くのだ。今、何よりも我々は詩人になり、生れたる貴族にならねばならない。先づ人間として、文明情操の根底を作っておくのだ。そして後、この一つの線路の上に、あらゆる反対矛盾する近代思想を走らせよう。自然主義も、民衆主義も、社会主義も、また之に衝突する他方の思潮も、かくて始めて我々の内地を走り、日本が世界的の交通に出てくるだろう。今日の事態に於けるものは、すべて島国鎖国の迷夢であり、空の空たるでた

らめの妄想にすぎないのだ。

然らば、なぜ日本的なるものは迷夢であり、空の空たるでたらめの妄想なのか。それは高名な結論「島国日本か？世界日本か？」の中で要約されている曰く、

かうして日本人の文明は、ひとへにただ芸術に向って発達する外はないだろう。なぜなら芸術は絶対主義のものであって、すべての相対的抽象観念を超越したところの、真の具象的、象徴的のものであるから。しかしながらまた、かうした立場に立つ日本人の芸術が、始めから西洋のそれと特色を異にすることも明らかである。我々の文明情操には、始めから相対上の主観と客観が無いのであるから、芸術上に於ても、勿論また西洋に於けるやうな主観主義と客観主義、即ち抒情詩的精神と叙事的^{リリカルソート}精神^{エビカルソート}の対立がない。日本で考へられてゐる芸術上の主観主義と客観主義とは、抒情詩^{リリック}と叙事詩^{エピック}の対立ではなくして、実に和歌と俳句との対立を意味するのである。

日本の俳句が世界に於ていかに特殊な文学であり、いかにレアリスティックな詩であるかと言ふことは、前に他の章で述べた通りであるが、もう一度改めて言っておかう。何よりも著るしいのは、俳句の立脚する精神が、西洋の叙事詩と反対の立場に立ってゐるといふことである。叙事詩^{エピック}の精神は「主観に対する反語」であり、否定によつての高翔なのに、俳句はむしろ「没主観への徹入」を精神とし、東洋的虚無観——それが西洋のニヒリズムと、全然反対のものであることに注意せよ。——に浸らうとする。西洋の叙事詩の精神は、科学の客観主義と共通であり、自然を肯定するのでなく、自然を征服しようとするところの、主観的権力感の現はれである。然るに俳句は之に反し、自然の中に没入し、自然と共に楽しまうとするのであって、科学や叙事詩の立脚する客観主義とは、全然精神が異つてゐる。俳句は言はば、詩に於ける絶対的客観主義だ。それは反動的でなく、日常生活の現実してゐる平凡事を、その平凡事として楽しんでゐる。

ずいぶん長ったらしい引用で恐縮だが、これによって朔太郎がなぜ東洋を去って西欧に向っていったか、短歌や特に俳句よりのがれて詩を志向したかの理由は明確だろう。煩をいとわず、その間のことを整理して反復すると、それは次の二つのことからなっている。即ち、日本文芸の世界では西洋に於けるような主観主義と客観主義、抒情詩的精神と叙事的精神とを同一基盤上で相向い合せ、たたかわす底の、主観を高調する叙事的精神が欠如しているということがその一つ、かかる弱点の著るしいのは特に俳句であるということがその二つである。

尚ここで一言付加すれば、「浄罪詩篇ノート」では、芭蕉・人麿・我々の詩とひと束にしていわれたが、彼が俳句よりも短歌を高しとしたことはこれによって明らかであり、又短歌については、新古今を絶讃しているかに見えて価値に於て万葉より低しとしていたことは、右のノートの随所にいわれているとおりである。

と共に十余年を経て再び転向が訪れ、日本への回帰となった。詩集『氷島』を前触れとして論集『日本への回帰』や『帰郷者』に於てであることは前述のとおりだが、今回も亦ドラスティックだったことは、後者に於ける次の一節によって知られる。曰く、

僕の如き凡庸詩人も、過去に長い間「西洋の国」を夢み、バタとチー
ズの匂ひにあこがれたが、所詮今にして思へば、かかる文学上の文明開
化が、真に身に附いて残る所何物ぞといふ思ひがする。僕の文学者とし
ての一生は、すべて「迷夢」であったかも知れないのである。云々。

まことに惜しまれるところで、なぜ中絶したのか、これが以下の本論のテーマだが、前進するに先立ち、一言朔太郎のために弁ずれば、いかに後退したとはいえ、保守反動化したというわけではなく、又いわゆるニヒリズムに圧倒されたのでもなく、むしろよい意味での自由人的〈彷徨〉の境地へ引ずり込まれたというのが真実だろう。彼自身の手になる幾多の言葉がこれを証してくれるが、たとえば次のごとき一節は、彼のシンセリティを証して余りがあるだろう。曰く、

現実は無である。今日の日本には何物もない。一切の文化は喪失されてゐる。だが僕等の知性人は、かかる虚妄の中に抗争しながら、未来の建設に向って這ひあがってくる。僕等は絶対者の意志である。悩みつつ、嘆きつつ、悲しみつつ、そして尚、最も絶望的に失望しながら、しかも尚前進への意志を捨てないのだ。過去に僕等は、知性人である故に孤独であり、西洋的である故にエトランゼだった。そして今日、祖国への批判と関心とを持つことから、一層また切実なジレンマに逢着して、二重に救ひがたく悩んでゐるのだ。孤独と寂寥とは、この国に生れた知性人の、永遠に避けがたい運命なのだ。

日本的なものへの回帰！それは僕等の詩人にとって、よるべなき魂の悲しい漂泊者の歌を意味するのだ。誰か軍隊の凱歌と共に、勇ましい進軍喇叭で歌はれようか。かの声を大きくして、僕等に国粹主義の号令をかけるものよ。暫く我が静かな周囲を去れ。

「国粹主義の号令をかけるものよ、去れ」といい、「過去に僕等は知性人だった、……今日祖国への批判と関心とを持つ」などともいいつつなぜ前進しなかったのか、なぜ中道にして回帰したのか。まことに怪奇だが、その原因は奈辺にあったのか。ここで節を改めて追求しよう。

3

そもそも朔太郎はなぜ回帰したのか、多原因とするは学界の定説で、朔太郎の中に彼が最も排撃して止めぬ自然主義が心底深くあり、それが抬頭して来たのだとみるは三好達治の見解であり、初期にすでに著るしい士への偏執があり、それが「郷土望景詩」のような作品とも、「日本への回帰」ともなったとするは吉本隆明の説明であり、又元来彼の世界観が西欧人におけるが如き前進的なそれではなく円環的構造のものだったとするは藤原定の論で、夫々一面の真理は得ているものの、卒直に言って決定的なものではない。極めて自負的で恐縮だが、私見をもってすれば、そこには二つの原因があった、それが朔太郎を支配したものと思料されるのである。二つの原因とは何か。一つは、劈頭にも紹介した日本の古典的ジャンルに対す

る評価、あるいはより適切には過信がそれであり、二つは彼がそもそもの素質からして思想家ではなかったということ、これである。この二つは、ある点で相通じているが、まず前者から始めよう。

さて、抑々の出発点に於て日本古典に対する評価があり、主として短歌がその典型だったことは劈頭に展開したとおりだが、それが年と共に日本文化全体にまで及ぼされ、それが西欧詩からの後退ともなったとみるは、決して荒唐無稽の解釈ではあるまい。勿論その間彼は特別に日本的ジャンルの作品を創作したとか、研究したとかいうわけではなく、外的徴表として、「谷神不在」にみられる老子への傾倒、俳人蕪村の評価、乃至は日本婦人のよさの再発見などをみるのみで、徐々に展開されていったとみるが正鵠を得てはいるが、しかしそれは存外強固なもので、相当根強いものだったようである。恰かもこれを立証するかのごとくまとまっているのが、『帰郷者』の劈頭に展開されている二種類の文明並存説である。世界に拡大する文化と凝縮する文化、あるいは別表現すれば横の文化と縦の文化とがあり、前者の系列に属するものが西洋の文化であるとするなら、後者のそれが東洋の文化である。ところで、西洋の文明は横へ横へ水平に伸びてゆく性格の文明であり、これに反して東洋の文明は、竪穴式に底へ底へと深く穿たれてゆく性格の文明である。今主としてこの東洋文明について布衍すれば、この文明は一見短小、素朴、時として未開野蛮の風すらある。われわれの家屋や工芸品、その他精神文化にみられるとおりである。しかしその反面、他方の極に細心の注意と工夫とを惜しまず、ひたすら内へ内へと掘下げてゆくことによって独自の空間を形成するに至ったのである。——およそ以上のごとく彼は両文化の性格を対比せしめ、その対立乃至併存説を展開したが、右のように述べられた東洋文化の精華とは、まさに十七文字の俳句や三十一文字の短歌がこれを代表するものだろう。とすればこのことは即ち頭初に引用した「日本語の韻文で最も洗練されているものは短歌である。この点で詩は歌の足下にも及ばぬ。……詩が歌より進歩しているのは、その内容についてではある。この点からみれば、歌は詩より十年遅れている。」云々に照応するもので、よって彼の回帰が内面的回帰

で、ある意味で必然的なものだったということになるわけである。

それはそれとしてしかし、われわれはそこに朔太郎の過誤をみるものである。端的に言ってそれは日本的ジャンルに対する〈過信〉ともいうべきものだったのであり、われわれは今改めてそういった朔太郎の一面を見直すべき要を感得するものである。要約していえば、短歌が詩と匹敵するとか、凝縮文明が拡大文明に比肩するとかいった論には組することのできぬ一種の過誤あるいは時代錯誤があるのである。今ミクロの問題たる短歌形式と詩形式とを比較すれば、俳句をも含めて短歌のごとき形式の文芸は、結晶体の美としてみれば、それはこよなく美しい。詩形に於ても形態に於ても然りで、極めて貧弱・矮小・素朴なようで実は非常に豊富、深甚である。しかしながらこれに正比例する欠陥のあることも事実で、それは文芸形式としては極めて原初的初歩的なものなのである。第一に、時律としてその効果が極めて微弱なことをあげうる。けだし、五が二回、七が一回しかないものや、五が二回、七が三回しかないようなものから律動が生じよう筈がなく、従って時律的流動としてみれば、極めて貧困なのである。更に第二に、内容の点からいっても、この種の形態の文学は、本来単純性、渾融性——要するに無構造的な性格のものであって、そこに雑多豊富の内容を盛り込むには難があり、知的に鞏固な空間性や築きあげられたもののごとき確実さに乏しいのである。最近短歌イコール奴隸の韻律論にみられるとおり、詩、いわゆる現代詩にも以上のごとき欠陥への誘惑なしとせず、極言すれば五十歩百歩の相違であるかもしれぬが、しかしそこに截然たる別があり、又あるべきなのである。——それはともかく、かりにも朔太郎の回帰が日本的短詩型文学への回帰であったとするならば、それはいささか過信だったというにはばからぬのである。

4

「(前略) 詩の本質は主観であり、且つ元来貴族的のものである故に、西洋文明の精神が潮流するところでは、詩は必然に先導に立ち、文学の一切を越えて崇敬される。然るに今日の我が文壇では、そのあまりに日本的な

レアリズムから、主観が一切排斥され、そのあまりに日本的なデモクラシイから、貴族感的なるすべての精神が嫌はれるため、詩は全く地位を得ることができないのだ。

吾人はかかる文壇を軽蔑しよう。詩人から文壇の方に降り、彼等に巻き込まれて行くのではなく、逆に文壇を吾人の方に、詩的精神の方に高く引きあげて教育しよう。でなければ永久に、我々の文化を世界的にすることはできないだらう。そして日本が世界的に進出した時、始めて我々の国語に於て、新日本の美や音律が生れるだらう。」

前に引用した「あらゆる決定的の手段は……」につづく一節で、西欧精神へのまことに軒昂たる傾倒で、さながら自らがすでに行進しはじめているかの概がある。なぜに西欧詩はすぐれ、日本的ジャンルは劣れるかの事由はすでに引用したとおりである。要するに、彼の長ずるところは、主観を高調する叙事的の精神であり、我の劣れるところは、貴族感を欠如せる、あまりにレアリスティックな自然主義である。こういった理論はほんとうにすぐれているのである。いささか飛躍するかもしれぬが、こういった立論の正しさは、現に戦後の現代詩がこれを立証しているのである。蓋し現代詩の理念とするところは、主観を高調する叙事的の精神を根幹とし、そしてこの同じ線の上からあらゆる反対する二つのもの——個人主義と社会主義、貴族主義と民衆主義、理想主義と現実主義——とを向き合わせ、同一軌道の上で衝突させようとするところにあるからで、これはまさしく朔太郎が志向したところのものである。だから朔太郎にして当初の志向を貫いていたなら、彼の真価はもっともっと上り、文字どおり詩聖の名をほしいままにしていたこと必定である。然るに彼はこの大道をつっぱしることなく、中道にして挫折したのであって、惜しみても余りある次第だが、なぜそうなったのか。ドラスティックないい方かもしれぬが、彼に本来思想家としての素質がなかったせいであると思うのである。これは科学者にして詩人の高内壮介の分析とも一致するところで、決して荒唐無稽の論ではないと確信するのだが、その証左には事欠かぬ。たとえばその格好の一つが、早くも昭和四年刊行のアフォリズム『虚妄の正義』で文明及び芸術

の進歩を否定していることで、今その論旨を要約すると、文明が進歩しないということについては、各時代には夫々特色があり、(恰かも史家ランケが考えたごとく) その間優劣はないということを根拠とし、次に芸術については、二つの論拠からこれをいっているのである。即ち、一つは個人について、もし進歩ありとせば、ひとは老年になるほど詩がうまくなる筈だが、そういうことはないということ、二つは人類の芸術史について、前の〈文明〉の場合同様各時代は夫々独自性をもつもので、古代より近代、近代より現代となるに従って作品の間に進歩があったなどすることは附会も甚だしく、非現実的だという。然らば芸術の推移如何といえ、そこに階梯といったものがあるわけではなく、唯、一つの谷から他の谷へと推移してゆくようなものだという。

朔太郎の以上の見解についていえば、一面の真理はあるものの、文明及び芸術について頭から進歩を否定してかかるなどといったことは、少なくとも一個の独断論というの外なく、詳しくはいわぬが、そういう姿勢そのものが好ましいものではない。

それにしてもしかし、なぜ彼ははじめ西欧へ傾倒していったのか、次にそのことが問題となるが、これ又私見の域を出ぬかもしれぬが、西欧への彼のあこがれは、論理の必然から導き出されたものでも、社会法則の研究から演繹されたものでもなく、素質が一種の〈情調〉としてあったと見るものである。換言すれば、ここからそれはいわゆる叙事的的精神——科学や社会思想を学んでこれを生活の場に滲透せしめて改善してゆくとか、主観を高潮せしめる詩的貴族精神——自由人としての主体性独立性にめざめて、これを実践するとかいったこととは遠く、唯一個の情緒としてのそれにすぎなかったものであり、そしてそれはかねてより彼の心底にあった日本的情調、具体的には定家にみられる一種の〈知的情調〉の発展ではなかったかと思われるのである。もし然りとすれば、上巻のごとき、短歌的抒情がここでもはたらいていたわけで、とにかく、思想家でなかったということと、前に述べた素質としての、日本古典への愛惜の念とが協同して、彼の西欧への傾倒を興起せしめ、又挫折せしめたと考えて大過ないだろう。

5

西は西

東は東

とわに会うこともなし

キプリング

と歌いつつも、終世東洋と西洋との邂逅を求めて彷徨した英国の一詩人のごとく、朔太郎も亦、「島国日本か？ 世界日本か？」と叫びつつ究極の解はえず、漂泊のひととして終始したとはいえ、心底深くその和解と融合に奔心したに相違ない。そして事実その証左はあるのである。即ち『抒情小曲集』所収の「郷土望景詩」と、そして何よりも詩集『氷島』一卷とがそれである。そしてよりくわしくは、前者は日本と西洋との、後者は漢語的東洋と西洋との融合とも解すべきだろう。とはいえ、こういった生なまの融合の試みは私の採らざるところである。以下これを主として「郷土望景詩」に就いて考察してもってこの拙文の結語といたしたい。

まず作品をあげよう。

広瀬川白く流れたり

時さればみな幻影は消えゆかん。

われの生涯らいふを釣らんとして

過去の日川辺に糸をたれしが

ああかの幸福は遠きにすぎさり

ちひさき魚は眼めにもとまらず。 (広瀬川)

ここに道路の新開せるは

直ちよくとして市街に通ずるならん。

われこの新道の交路に立てど

さびしき四方よもの地平をきはめず

暗鬱なる日かな

天日家並てんじつの軒に低くして

林の雑木まばらに伐られたり。

いかんぞ いかんぞ思^{しる}惟をかへさん
 われの叛^{そむ}きて行かざる道に

新しき樹木みな伐られたり。 (小出新道)

二篇ほど引いてみた。全体として日常次元の生活作品でリアリスチックであり、且一脈短歌的抒情、あるいは実相観入的感慨の反映たることは、直感的に明白であろう。そしてこれが『月に吠える』や『青猫』に比してスタイルに於ても内容に於ても著しい後退であることも、明白だろう。しかもこの一集は『青猫』を去ること僅かに2年、『詩の原理』の刊行に先立つ3年も前のものであることを思えば、彼の後退は実作に於てすでに早くから始まっていたと解すべきだろう。

しかしそのことは、暫く措く、筆者の興味はここに表現されている日本的抒情と西欧詩との和解乃至融合にあり、これはたとえば筆者が最近別稿で報告した大岡信の新詩集『悲歌と祝禱』(青土社)の中でここみられているところと酷似するが、大岡の作品同様これは筆者の採らざるところである。かしこで筆者は東洋と西洋、短歌と詩とを[・][・]ちかに融合せしめんとするがごとき生^{なま}の試みは邪道であるとしたが、今この場合もその匂いなしとせず、筆者はこれを評価せぬのである。

ここで一步すすめていえば、朔太郎にして真に東西の融合を果たさんとするのであってみれば、むしろ西欧詩へとつきぬけて、そこからかえりみて日本を歌うか、あるいは思い切って詩は廃して短歌や漢詩をつくるべきであったと思われるのである。序でながら前者の道を歩んだのが立原道造であり、後者のそれが斎藤茂吉だったと、筆者はひそかに考えているのである。

参 考 文 献

- 「萩原朔太郎」(日本文学研究資料叢書)昭和46年, 有精堂
 「ユリーカ」総特集「萩原朔太郎」昭和49年, 青土社
 渋谷国忠「萩原朔太郎論」昭和45年, 思潮社
 伊藤信吉編「萩原朔太郎論研究」昭和49年, 思潮社
 那珂太郎編「萩原朔太郎研究」昭和51年, 青土社
 岡崎義恵「日本文芸の様式と展開」(著作集2)昭和37年, 宝文館